

〔特集〕先端医療と病院

日進月歩の医学研究の成果をいかに速やかにかつ安全に臨床に応用するかは医療政策の役割の1つである。病院には先端医療に取り組むことで、より良い医療を提供すると同時にブランドイメージを高めるという目的もある。しかしながら、先端医療には経済政策・産業政策としての側面もあることから、経済的な不確実性や倫理的に検討すべき課題もある。本特集では先端医療について、医療政策および産業政策的視点、生命倫理的視点、病院の経営的視点といった多面的視点から検討した。

岩田論文では細胞シートを例として、先端医療研究の具体的内容が詳細に説明されている。これを一般臨床に広めるためにはCRCなどによる支援が不可欠である。CRCの重要性は広く認識されるようになっているが、それが本来の目的に沿って十二分に機能するためにはCRCを担う人材の育成、そしてそのキャリアパスへの配慮が不可欠であることを今井論文は指摘している。先端医療をめぐる競争は国際的に激化しているが、1つの組織が単独でその川上戦略・川下戦略をたて、また実行していくことは難しい。そこで、日本発の先端医療開発を進めるためのシステムとして石黒論文では「中部先端医療開発円環コンソーシアム」の概要が説明されている。日本全国への発展が期待される枠組みである。

ところで、わが国では従来基礎研究と臨床研究との橋渡しが十分でないという指摘がある。上記の「中部先端医療開発円環コンソーシアム」はそれを克服するための枠組み作りであるが、長村論文ではその基盤としてのトランスリレーション研究の底上げの必要性を指摘している。日本版NIHの創設にあたっては十二分に配慮されるべき論点である。

先端医療については産業政策としての視点も重要であるが、前提として新技術の「有効性」が担保されていなければならない。池田論文はその評価のあり方、そして田倉論文では産業政策と医療政策とのバランスについて詳細に論じている。また、このバランスを議論する際には倫理面での検討が不可欠である。樋口論文では事例をあげてわかりやすくこの問題についての論点が整理されている。

先端医療に関しては「急性期」医療の印象が強いが、蜂須賀論文で紹介されているように、わが国ではロボット技術を用いたリハビリテーション医療・介護ケアの研究が進んでいる。他の先進国に先んじて高度高齢社会に突入する日本は、この分野で世界をリードできる位置にある。

笠原論文は以上のような先端医療を厚生労働省がどのように評価していくのかという基本的な考えを説明している。確かに諸外国に比較すれば、認可のスピードにおいて改善すべき点があることは否定できないが、着実に進んでいることは評価されるべきであろう。

本特集が今後の病院経営における先端医療のあり方を考える上で一助になれば幸いである。

松田 晋哉

産業医科大学医学部公衆衛生学教室 教授